職業知識の発達に関する研究 Ⅱ

武田正信

Ⅰ 序

「職業知識」とはいうものの、その内容は広範なものであって、いずれの職業について、どれほど広く、また深く詳細に知っているかを個々に調査することは容易なことではない。職業知識の発達について何を指標としてあとづけて行くかはまことに困難な問題である。

D・E・スーパー氏は「職業経歴の類型研究」の一環としてミドル・タウン市の第8・9学年の男子生徒を第一年度の対象として、次後20年間にわたって観察を続ける研究に着手している。この研究については「職業経歴の類型研究」第二集である"The Vocational Maturity of Ninth Grade Boys." (1960) に第一年度の結果を報告している。この書の緒言において述べていることは、この研究の問題点を短的に示している。[1] 即ち、

多くの学校では、男女の生徒が第9学年になると、いくつかのカリキュラムの中から選択させるという制度をとっている。その選択が修学上の選択であることは、勿論のことであるが、それはまた同時に、職業上の選択でもある。そ

の理由は選択するカリキュラムがちがえば、結局、職業のちがいを招くからである。そこで次のことがらを問題としてあげている。

(1) 男女の生徒は、第8学年を了えるころ、または第9学年に進むころ、このような選択をなす用意が、できているか？

(2) 彼らは、このような選択をなし得るほどに、自分自身を知り得る発達段階に、達しているか？

(3) 彼らの諸能力、興味およびパースナリティは、十分の発達をとげているか？

(4) 彼らの職業志望は、十分に確立されているか？

(5) 彼らは労働の世界および教育の世界をはたして十分に知っているか？

なおスーパーらはこの研究において青年の職業的成熟を5つのカテゴリーに分っているがその第2のカテゴリーは――「好きな職業に関する情報と計画」であって、その指標のひとつとして、「好きな職業に関する知識の明細さ」をあげている。そして、好きな職業に関して (a) それに従事するのに必要な諸条件、(b) その職業の活動内容、(c) 作業条件、(d) 雇用と昇進の機会、等をどれほど詳細に知っているかを生徒に自由に記述させ、これを別に作成した尺度によって評定する方法をとっている。

また藤本喜一氏は青少年の職業的発達の程度を、その「職業に関する知識」の推移においてとらえようとし、「職業の名前」と「仕事の内容」を以て職業知識の指標としている。50職業を掲げて、これらの職業の仕事の内容の説明短文を正誤両様に付しておき、被調査者が正誤いずれに○印を付するかによって、判断する方法がとられている。[3]

ここに報告する研究は、昨年の研究を続行したものであって、[3] 調査方法には殆んど変りがないが、結果の整理に相違がある。

Ⅱ 調査の対象

調査の対象は、小学校4・6年、中学校1・3年、高等学校1・3年の男子・女子生徒である。地域は前回と同様に農業、工業、商業、住宅地域に分布するように求めた。高等学校については、小、中学校と同様の地域に対象を求める準備が出来なかったので、地域的偏りが少いものと考えられる高等学校を男子・女子各々一校を選んだ。

表1の1・2・3は、地域、学校、学年、性別の員数を示す。対象は小学校生徒――4年、男子一六四人、女子一六五人。6年、男子一七四人、女子一五三人、計六五六人。中学校生徒――Ⅰ年、男子二六四人、女子二五五人。Ⅲ年、男子二八三人、女子二七〇人、計一〇七二人。高等学校生徒――(1)年、男子九三人、女子一一〇人、(3)年、男子六六人、女子九三人。計三六二人である。対象の男子合計は一〇四四人、女子合計は、一〇四六人、総合計二〇九〇人である。（以下学年の表記は小学校は4・6と、中学校はⅠ・Ⅲと、高等学校は(1)・(3)と示す）。

調査の時期は昭和36年6月中旬より7日上旬にかけて行った。

Ⅲ 調査の方法

サンプルとしてどのような職業を選ぶべきかの問題については、青少年個々人が、その生活経験を通じてよく熟知

表1の1　地域・学校・学年・性別員数表

（小学校）

地域	小学校	4年		6年		合計
		男	女	男	女	
農業（兵庫県氷上郡）	村雲小学校	16	22	21	26	85
工業（大阪市西淀川区）	香養 〃	49	43	55	39	186
商業（神戸市葺合区）	二宮 〃	47	52	50	47	196
住宅（神戸市東灘区）	本山第三 〃	52	48	48	41	189
計		164	165	174	153	656

表1の2　地域・学校・学科・性別員数表

（中学校）

地域	中学校	Ⅰ年		Ⅲ年		合計
		男	女	男	女	
農業（兵庫県氷上郡）	東雲中学校	21	19	26	19	85
工業（大阪市西淀川区）	歌島 〃	52	52	54	52	210
商業（大阪市東区）	東 〃	62	45	69	44	220
住宅（伊丹市）	伊丹 〃	50	47	49	45	191
（西宮市）	報徳学園	79		85		164
（尼崎市）	園田学園		92		110	202
計		264	255	283	270	1072

報徳学園・園田学園の生徒は広範囲より通学しているため地域を限定しにくい。

表1の3　地域・学校・学年・性別員数表

（高等学校）

地域	高等学校	(1)年		(3)年		合計
		男	女	男	女	
（西宮市）	報徳学園	93		66		159
（尼崎市）	園田学園		110		93	203
計		93	110	66	93	362

している職業であることが必要であり、しかもこれらの職業は相互に出来るだけ異った特質を有していることを条件としなければならない。このような点を考慮にいれて、前回の研究では、「医師」「小学校の教師」「バスの運転手」「大工」「理髪師」を選んだが、今回もこれらの職業名を用いた。

また職業の内容として考えられる特質については、「視力」「危険度」の項目に関しての理解の分散が大であったり、「色盲」については分散が小でありすぎるようであったので、これらを省き、視力を含んだものとして「感覚」の項目を加えた。即ち、職業知識の内容としてとりあげた特質は、「教育程度」「資格」「職業年令」「感覚」「知能」「精神的機能」「力量」「動作」の8項目である。各項目に2乃至5の問題を設け、いずれの職業が、どの問題に該当するかを組合せ法によって選択回答せしめた。

Ⅳ　調査の結果とその考察

医師、小学校教師、バス運転手、大工、理髪師の5職業について、教育程度、資格、知能、力量、動作、精神的機能、職業年令、感覚の8特質に関する理解の程度を、学年を逐って発達的に求めた。

8項目についての設問は、5職業について各々回答を求めている故に、正答に1点を与えると40点満点となる。得点の整理は、職業別に8項目の得点を合計し、これを職業別合計得点とし、また項目別に5職業の得点を合計し項目別合計得点とした。また、職業別、項目別得点の総計を総得点とした。

総得点の分布は表2の1・2に示す通りである。正規分布に近い分布であるが、χ^2検定を行った結果、正規分布と認められなかった。

表2の1　　総得点分布表

（男　子）

得点	小学校		中学校		高等学校		合計
	4年	6年	1年	3年	1年	3年	
35～		1	2	4	1	4	12
30～34		11	19	27	16	22	95
25～29	14	43	62	75	34	22	250
20～24	38	52	97	100	31	13	331
15～19	56	41	60	56	9	4	226
10～14	34	18	19	17	2	1	91
5～9	18	7	2	4			31
～4	4	1	3				8
N	164	174	264	283	93	66	1044
M	16.51	21.02	21.05	22.69	25.01	27.45	21.68
S.D.	5.92	6.40	5.48	5.70	5.25	5.48	6.40

表2の2　　総得点分布表

（女　子）

得点	小学校		中学校		高等学校		合計
	4年	6年	1年	3年	1年	3年	
35～				4			4
30～34		5	8	23	15	9	60
25～29	3	37	59	81	32	28	240
20～24	36	58	87	101	32	40	354
15～19	61	36	64	45	21	7	234
10～14	40	14	29	15	10	8	116
5～9	21	2	8	1		1	33
～4	4	1					5
N	165	153	255	270	110	93	1046
M	15.44	21.11	20.61	23.13	22.95	23.08	20.98
S.D.	5.70	5.48	5.70	6.33	5.92	5.48	7.60

表3　学年差の検定（U検定による）

学年間	男子	女子
小4—小6	5.72 **	8.18 **
小6—中Ⅰ	1.94 *	3.46 **
中Ⅰ—中Ⅲ	4.95 **	4.62 **
中Ⅲ—高(1)	3.37 **	0.09
高(1)—高(3)	3.22 **	0.02

** は1％の危険率
* は5％の危険率　で有意差を示めす。

各学年の得点平均は男子にあっては、小4年の16.51点を最低に学年を逐って上昇し、高(3)年の27.45点に達している。女子では、小4年の15.44点を最低に逐年上昇して中Ⅲ年に23.13点と最高を示し、高校(1)年で22.95点と下降し高(3)年で23.08点と上昇している。

各学年間に発達的な差異が認められるか否かをU検定によって有意差を求めた。その結果は表3に示す通りで、男子にあっては小4年——小6年、中Ⅰ年——中Ⅲ年、中Ⅲ年——高(1)年、高(1)年——高(3)年の間に1％の危険率で、小6年——中Ⅰ年の間に5％の危険率で有意差が認められた。女子では、小4年——小6年、小6年——中Ⅰ年、中Ⅰ年——中Ⅲ年の間に1％の危険率で有意差が認められ、中Ⅲ年——高(1)年、高(1)年——高(3)年の間には有意差が認められなかった。

このように、男子にあっては、各学年の間に有意差が認められ、女子では、高学年の2段階を除いて各学年間にやはり有意差が認められ、職業的発達が証された。

同学年の男女間に性差が認められ得るか否かを検定した結果、表4に示す通り、小学校4・6年では差があるとはいえなかった。中学校では、Ⅰ年で5％の危険率で有意差が認められたが、Ⅲ年では差があるとはいえなかった。高等学校では、(1)年で5％の危険率で、(3)年で1％の危険率で有意差が認められ

た。

学年を逐って、得点を職業別に、項目別に、総合的に比較検討するために、次の式によって職業別得点比、項目別得点比及び総得点比を算出した。

$$職業別得点比 = \frac{職業別合計得点}{1点 \times 被調査者数 \times 8(項目数)} \times 100$$

$$項目別得点比 = \frac{項目別合計得点}{1点 \times 被調査者数 \times 5(職業数)} \times 100$$

$$総得点比 = \frac{職業別・項目別総得点}{1点 \times 被調査者数 \times 8(項目数) \times 5(職業数)} \times 100$$

これらの各得点比を表に示したのが表5・表6の1・2である。

総得点比は表5・図1で示す通り、男子においては小学校4年より高校(3)年に至るまで順調な上昇の発達的傾向を示している。即ち設問に対して小4年では41.7%の理解をもち漸次学年を逐って理解の比率を高め、高(3)年に至って68.4%に達している。女子においては、小4年では38.7%と男子のそれと少しく劣り、漸次理解を高め中Ⅲ年で58.6%と男子より優位である。高(1)年で理解が低調となり高(3)年で60.2%と最も高いが、男子のそれと比すると低調である。

職業別得点比は表6の1・2で示す通りである。男子においては、小4年では、「大工」「バス運転手」がそれぞれ46.80%と46.19%と高位を占め、「大工」は中Ⅲ年を除いて常に最高位を保っている。これに反し、「バス運転手」は他の発達傾向と異り、低学年において早く発達し、その後の発達が緩慢である。高(3)年では60.04%と最下位となっている。このことは、この2職業が低学年で特に関心を寄せられているものと考えられる。「理髪師」についての理解は33.46%

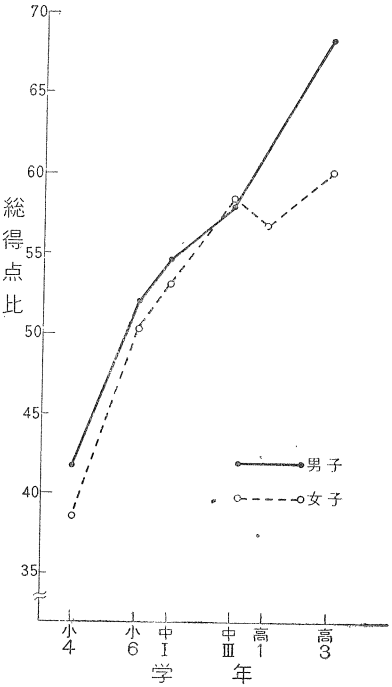
表4　性差の検定（U検定による）

学年		U
小	4	1.60
小	6	0.05
中	Ⅰ	2.12 *
中	Ⅲ	0.86
高	(1)	2.35 *
高	(3)	4.24 **

表5　総得点比

性別＼学年	小学校 4	小学校 6	中学校 Ⅰ	中学校 Ⅲ	高等学校 (1)	高等学校 (3)
男子	41.7%	52.2%	54.7%	58.1%	62.0%	68.4%
女子	38.7	50.3	53.2	58.6	56.9	60.2
男子－女子	3.0	1.9	1.5	−0.5	5.1	8.2

図1　総得点比の発達傾向を示す



と最も下位にあり、その後の各学年においても最下位であるが他と同様順調な発達傾向を辿っており、高(3)年では67.42%と他の上位の職業に接近している。「医師」と「小学校教師」は42.38%と40.17%で中間位であるが、その後の学年においても略同じような関係を保ち、両者は相似の順調な発達傾向を示しており、高(3)年では70.64%と71.02%となっている。

女子の小4年では、総得点比が38.7%と男子に比して3.0%少く、職業別得点比の範囲もせまい。得点比の順位は男子と同じで、「大工」と「バス運転手」とは41.95%と41.74%と近似して上位を占め、「医師」と「小学校教師」とは38.56%と38.26%で近似している。「理髪師」は32.73%と最下位を占めている。これらの職業の発達的傾向は高校を除いて男子の傾向と近似している。

表6の1

職業別得点比　（男子）

職業	小学校		中学校		高等学校		小4～高(3)
	4	6	Ⅰ	Ⅲ	(1)	(3)	
医師	42.38%	54.31%	56.01%	59.85%	62.77%	70.64%	28.26%
小学校教師	40.17	52.73	55.49	62.54	66.53	71.02	30.85
バス運転手	46.19	50.14	52.25	53.27	57.93	60.04	13.85
大工	46.80	60.42	61.40	59.58	66.53	73.86	27.06
理髪師	33.46	46.38	48.09	51.06	56.99	67.42	33.96

表6の2

職業別得点比　（女子）

職業	小学校		中学校		高等学校		小4～高(3)
	4	6	Ⅰ	Ⅲ	(1)	(3)	
医師	38.56%	55.03%	55.54%	61.66%	60.89%	64.42%	25.86%
小学校教師	38.26	51.79	55.88	62.69	59.40	62.23	23.97
バス運転手	41.74	50.65	51.52	52.00	51.38	53.43	11.69
大工	41.95	50.08	56.42	60.78	58.94	62.64	20.69
理髪師	32.73	43.99	44.22	55.44	53.33	58.10	25.37

項目別得点比は表7の1・2で示す通りである。男子の小4年では「精神的機能」が得点比57.2%で最も高く、「力量」が53.2%でこれに次ぎ、以下「資格」が44.8%、「動作」が41.0%、「感覚」及び「知能」がともに37.4%、「教育程度」が32.2%、最下位に「職業年令」が31.5%となっている。小6年では「資格」を除いて他は近似の発達的傾向を辿っている。

低学年の小4年において得点比の高い項目より順に発達をあとづけて見ると、第1位の「精神的機能」は小6年より中Ⅲ年まで発達の上昇が見られず、高(3)年で79.7%（2位）、第2位の「動作」も前者と相似の傾向をとり、高(3)年で61.2%（5位）となっており、わずかに8%の発達しか見られず、8項目の中で最も少い。第3位の「資格」は、小6年で他に比し発達傾向が頻しく、高(1)年でdipが見られるが、高(3)年では88.2%で最も高い順位を占め

表7の1　　項目別得点比

（男子）

学年 ＼ 項目	小学校		中学校		高等学校		小4～高(3)
	4	6	Ⅰ	Ⅲ	(1)	(3)	
1. 教育程度	32.2%	38.1%	44.1%	50.9%	49.3%	60.0%	27.8%
2. 資格	44.8	68.9	73.3	80.8	77.5	88.2	43.4
3. 知能	37.4	46.9	50.0	53.2	55.1	54.5	17.1
4. 力量	53.2	58.6	58.5	57.8	63.5	61.2	8.0
5. 動作	41.0	53.9	57.2	57.8	69.3	79.1	38.1
6. 精神的機能	57.2	69.2	69.2	68.4	75.9	79.7	22.5
7. 年令	31.5	38.3	37.8	47.1	63.7	70.3	38.8
8. 感覚	37.4	44.9	48.9	42.1	43.3	55.2	17.8
総得点比	41.7	52.2	54.7	58.1	62.0	68.4	26.7

表7の2　　項目別得点比

（女子）

項目 ＼ 学年	小学校		中学校		高等学校		小4～高(3)
	4	6	Ⅰ	Ⅲ	(1)	(3)	
1. 教育程度	25.9%	39.5%	42.3%	53.8%	37.4%	58.3%	32.4%
2. 資格	41.6	66.0	66.8	77.1	81.8	84.4	42.8
3. 知能	36.8	46.8	49.3	52.9	52.3	52.8	16.0
4. 力量	52.5	41.8	54.3	62.2	59.8	65.1	12.6
5. 動作	39.6	58.3	55.9	62.4	61.3	61.3	21.7
6. 精神的機能	51.0	71.9	65.8	62.7	64.2	50.3	−0.7
7. 年令	33.2	37.2	40.1	52.3	53.1	63.1	29.9
8. 感覚	28.0	42.0	46.7	44.6	44.4	46.2	18.2
総得点比	38.7	50.3	53.2	58.6	56.9	60.2	21.5

ている。第4位の「動作」は中Ⅲ年に発達が見られないが、高(3)年で79.7%（3位）、第5位の「知能」と第6位の「感覚」は相似の発達を示しているが、前者は、中Ⅲ年、高(1)年で落ち込んでいる。いずれも高(3)年で54.5%（7位）と55.2%（8位）の下位を占めて、発達傾向は低い。第7位の「教育程度」は高(1)年で上昇的発達が見られないが、高(3)年で60.0%（6位）、第8位の「年令」は低学年では最下位にあるが、発達傾向は「資格」に次いで頻しく高(3)年で55.2%（4位）となっている。

女子の項目別得点比による発達的傾向は、総得点比の発達的傾向にも現われているように、高(1)年で落ち込みを見せていることである。この傾向の最も頻しいのは「教育程度」についてである。これは「バス運転手」について6.4%の得点比を得ているにすぎない点も原因している。小4年で得点比の高い項目の順にその発達的傾向をとあづけて見ると、第1位の「力量」52.5%は小6年で落ちこみ、高(3)年で65.1%（2位）、第2位の「精神的機能」51.0%は、小6年で最高となり、そのあと下降して高(3)年で50.3%（6位）となり特異な経過を辿る。第3位の「資格」41.6%は発達的傾向が男子と相似して高く、高(3)年で84.4%（1位）と最も高い。第4位の「動作」39.6%は中Ⅰ年でdipが見られ、中Ⅲ年より上昇傾向を示さず高(3)年で61.3%（4位）、第5位の「知能」36.8%は同じように中Ⅲ年より上昇を示さず高(3)年で52.8%（7位）、第6位の「年令」33.2%は学年を逐って発達し高(3)年で63.1%（3位）、第7位の「感覚」28.0%は中Ⅰ年より上昇傾向を示さず、高(3)年で46.2%（8位）と最下位にあり、第8位の「教育程度」25.9%は中Ⅲ年までは順調な発達を示しているが、高(I)年で深くおちこみ、高(3)年で58.3%（5位）となっている。

設問に対する検討として相関研究を行っていないが、職業と特質についての得点に偶然性が認められるか否かの検定を行った。その結果は表8に示す通りである。χ^2検定の結果、自由度28で1%以下の危険率で偶然によるものでないことが認められた。

表8　職業別・項目別偶然性の x^2 検定

項目	小学校				中学校				高等学校			
	4		6		Ⅰ		Ⅲ		(1)		(3)	
	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F	M	F
1	132.8	42.3	85.6	65.2	94.9	92.0	91.2	126.4	40.3	51.4	53.5	40.1
2	66.5	30.4	28.5	17.9	21.9	29.1	15.6	9.3	6.1	4.2	3.4	4.2
3	47.0	25.0	55.5	27.9	113.4	77.1	94.8	78.7	91.0	26.6	26.7	49.6
4	59.8	51.0	43.5	44.7	83.1	96.7	99.2	79.0	119.9	43.6	17.9	31.4
5	16.4	12.0	5.8	5.3	7.1	8.6	9.2	6.1	1.1	2.7	2.2	4.4
6	11.9	8.0	5.6	43.2	10.1	10.2	9.2	20.9	24.4	5.3	0.5	10.6
7	6.7	1.6	3.8	15.9	6.1	19.7	27.0	32.9	3.4	6.0	1.2	6.2
8	41.7	10.6	43.7	38.6	48.3	68.7	50.5	39.9	26.8	31.0	42.2	21.5
x^2	382.8	180.9	268.2	258.8	384.8	402.1	397.4	393.2	313.3	170.9	147.1	168.0

以上の如く、女子高校に対象としての不十分な点があり、また設問になお検討の余地があるが、総得点を指標にとれば、職業知識の発達を実証し得るものと考えられた。

Ⅴ　要　約

一、小学校4年より高等学校3年にわたる男女生徒を対象として、「医師」「小学校教師」「バス運転手」「大工」「理髪師」の5職業について「年令」「教育程度」「資格」「知能」「力量」「動作」「精神的機能」「感覚」の8項目に関する知識理解の程度を求め、職業知識の発達の様相を探ろうとした。

二、調査による得点分布は正規分布とはいえなかったが、それに近いものと見られた。

三、得点の分布は、学年の進むにつれて、高得点の方に移行が見られた。

四、学年間に発達的な差異が見られた。即ち、男子では、各学年間に1%乃至5%の危険率で有意差が見られ、女

子では、高学年の2段階を除いて、各学年間に1％の危険率で有意差が見られ、職業的発達が実証されたと考えられる。

五、男女間では、小学校4・6年及び中学校3年では有意差が認められず、中学校1年、高校1・3年において、1％乃至5％の危険率で有意差が認められ、高校を除いて、男女間に近似の発達的傾向が見られた。

六、設問の内容についてなお検討の余地があるが、得点には偶然性が認められないことを検定し得た。

七、設問の理解は男子では小学校4年で41.7％で、学年を逐って次第に高まり、高校3年で68.4％に達している。女子では、小学校4年で38.7％で、男子と近似の発達傾向を示し、中学校3年で58.6％となる。

八、低学年の小学校4年で理解程度の比較的高い職業や特質で、その後の発達が他に比して緩慢なものがある。「バス運転手」「力量」などがそれである。

最後に、この調査に当って、協力を得た各学校の諸先生に深い感謝の意を表します。また調査をともに行った学生諸君の労を多とします。

――一九六一・一二・一〇――

――関西学院大学文学部教授――

参考文献

(1) Super D.E. and Overstreet, P.L. *The vocational maturity of ninth grade boys.* Teachers College, Columbia University. New York. 1960.

(2) 藤本喜八。職業知識の年令的発達に関する研究　立教大学社会学部研究紀要　応用社会学研究　第4集　1961。

(3) 武田正信。職業知識の発達に関する研究　人文論究　第11巻　第4号